



掘りだしものカタログ1 ■ 1-01
『蜜柑』芥川龍之介著
『舞踏会・蜜柑』所収
角川文庫(1968.11) ¥500



掘りだしものカタログ6 ■ 6-02
『神の微笑』芥川龍之介著
『芥川龍之介全集4』所収
ちくま文庫(1987.1) ¥840

芥川龍之介 あくたがわりゅうのすけ

明治25(1892)・3・1～昭和2(1927)・7・24。小説家・俳人。東京都生。東京帝国大英文科卒。第三・四次「新思潮」同人。『鼻』(大5)を漱石に激賞される。西洋文学と江戸文化を主な背景に、多彩な形式・テーマで洗練された短編小説を次々に発表。大正8年、大阪毎日新聞社友。新たな創作方法を模索し、昭和に入り谷崎潤一郎と「小説の筋」について論争したが、「唯ほんやりした不安」の言葉とともに自殺。遺作『幽車』(昭2)『西方の人』(同)等。(小澤純)



DVD・映像
『河童 kappa』
(2006)
製作・配給: カエル
カフェ
監督: 秋原正俊
脚本: 落合雪恵
出演: 谷中敦、小倉
一郎、松田洋治
(DVD販売元) ジェネオン エンタテインメント

みどころ

最晩年に書かれ、社会風刺的な侧面だけではなく、芥川がこの作品に託した「僕自身に対するデグウ」(＝嫌惡)や「鬱懃」との関わりからも読み解かれてきた。河童世界には笑いと狂氣と死が遍在し、それを「何枚でも書けるつもり」と斎藤茂吉に宛てた芥川の心境の凄まじさは、遺作にまで引き継がれていく。芥川は民俗学的興味などから河童にこだわり、絵も生涯を通じて描き続けた。近年、河童世界の語り手「患者」第二十三号の存在に注目が集まり、「河童語」を学びそれを翻訳し人間世界で物語るという構造が意識化され、綿密に分析された。言語をめぐる主体・他者や意識・無

意識の関係、震災以後の都市の変貌に重なる世界認識の揺らぎなどが指摘されている。

あらすじ

ある精神病院の患者第二十二号が喋る話である。三年前の夏、「僕」は梓川の谷に現れた一匹の河童を追つて、河童の国に転げ落ちた。「僕」は「特別保護住民」となつて、次第に河童世界の言葉や生活習慣を学んでいく。河童は人間の眞面目に思うことをおかしがり、反対に人間のおかしがることを真面目に思う。河童の子供は生まれるかどうかを選択し、雌の河童が雄を追いかけ回し、驢馬の脳髄から本や絵が量産される。社長のゲルから失業者を食料にする

ことを教えられ、「僕」は嘔吐する。詩人のトックが自殺した後、「僕」は生活の大寺院を訪れるが、「旺盛に生きよ」と説く長老もまた、矛盾を抱えていた。「僕」は河童の国が憂鬱になり、再び人間世界に帰ったが、以前のように馴染めず、ついに入院した。(小澤純)

4-01

河童 かっぱ

- ・河童の国が舞台
- ・戯画化された日本
- ・最晩年の作品

河童 他二篇 芥川龍之介作



ここに描かれた奇怪な「河童」の国は、戯画化された昭和初期の日本社会そのものであり、また生活の上からも創作物の上からも追いつめられていた作者(1892-1927)の不安と苦悩が色濃く影を落している。

この作品を書き上げた5ヵ月後、芥川は自ら命を絶った。同じく最晩年の作「蜃気楼」「三つの窓」を併収。(解説・吉田精一)



『河童 他二篇』芥川龍之介著 岩波文庫(2003.10) ¥399



"Kappa"
Peter Owen Publishers
(訳) Geoffrey Bownas

■書誌

- 初出は「改造」昭和2(1927)・3、生前単行本未収録、没後『芥川龍之介全集』第4巻収録、昭和2・11、岩波書店刊。
■文庫情報
『河童・戯作三昧』芥川龍之介著 角川文庫(2008.7) ¥420
『芥川龍之介の「羅生門」「河童」ほか6編』芥川龍之介著 角川ソフィア文庫(2006.10) ¥740
『河童』芥川龍之介著 集英社文庫(1992.9) ¥360
『河童・或阿呆の一生』芥川龍之介著 新潮文庫(1968.12) ¥380